

### 12-2 松本城クイズ47 抜け穴伝説と小笠原牡丹について（解答・解説）

松本城管理事務所研究室

今回は松本城の抜け穴伝説の結末（問題5まで）と小笠原牡丹（問題6より）についてお尋ねしますのでお答え下さい。

1. 松本城にも抜け穴伝説がありました。どこからどこまであったと語りつがれてきたのでしょうか。次の中から一つ選びなさい。・・・・・・③

松本城の抜け穴伝説は、天守一階の天守台から城の北側にある城山への抜け穴があったと語りつがれてきた。

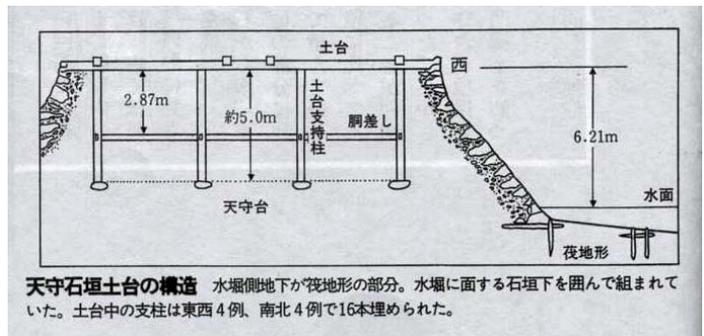
2. さて天守一階のどこの部分から、抜け穴の入り口があったといわれていたのか、次の中から一つ選びなさい。・・・・・・②



天守一階の北東側に写真のような場所があります。ここが抜け穴の入り口と語り継がれてきた。一間四方のこの場所から、地下にトンネルを掘って城山に通じているとされていた。

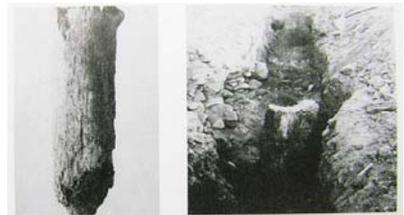
3. 昭和27年3月頃、解体復元工事が進んで天守台の土台面が現れてきた時のことでした。抜け穴があるかもしれないので注意して行ってほしいと告げられました。みんなで慎重に調査したところ抜け穴らしいところが見つかりました。さらに掘り下げると横穴も見つかりました。全部で16箇所の穴が見つかりました。この穴は何だったのでしょうか。次の中から一つ選びなさい。・・・・・・①

右図のように天守台の中の支持柱が腐ったあとが穴になっていた。縦に16本、横にも柱をつないだ横穴もみつかった。400年余にわたって天守千トンの重さを支えていたことが分かった。



4. 16個の穴のひとつから、杭がほぼ原型に近い形で見つかりました。ほかの穴からは杭はみつかりませんでした。このことから天守の重みを支えている柱穴ということがわかりました。みつかった杭は今どこに展示してあるのでしょうか。次の中から一つ選びなさい。・・・・・・④

天守一階南側武者走りより上の段のケースの中に納めてある。



5. 問題4のことから残念ながら抜け穴伝説は消え去りました。この抜け穴伝説が発せられたきっかけとなった一階にある穴は何だったと考えられているのでしょうか。一つ選びなさい。・・・・・・③

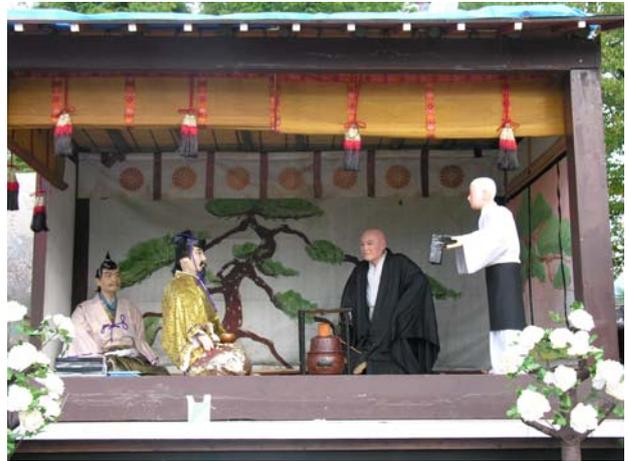
いろいろと考えられている。文化14年（1817）3月に一人の武士が天守を拝見したのによれば、「・・・北東ノ方ニ一間ニ二間の炉あり・・・」とっている。

次の物語を読んで、——戦の部分の問題に答えなさい。

「・・・天文19年（1550）甲斐国を発した武田晴信（信玄）は、信濃守護〇〇〇〇〇〇の居城林城を攻めました。わずかな抵抗を試みたのみで林本城を捨てることになってしまいました。林城を捨てることを決めた信濃守護は、大切に育て続けてき、きれいに咲いている牡丹が敵兵に踏みにじられることを悲しく思い、何としても戦乱から守らねばと考え、祈願寺の住職に牡丹を託そうとしました。・・・」

6. 当時の信濃守護であった人は、次の誰でしょうか。一人選びなさい。・・・  
・・・②

天文19年（1550）、武田晴信（信玄）に攻められた信濃の国守護・小笠原長時は戦うことなく林城をあとにした。



7. きれいに咲いている牡丹の花を、何と呼んでいたのでしょうか。次の中から一つ選びなさい。  
・・・①

大切に育て続けてきた白い花を咲かせている牡丹（白牡丹）が敵兵に踏みにじられることを悲しく思った。

8. 祈願寺であったお寺は、次のうちどれでしょうか。一つ選びなさい。・・・④

兎川寺である。菩提寺は広沢寺である。

9. 「・・・大切な牡丹を一箇所育て、万一絶やしてしまうことを恐れた住職は、檀徒総代の久根下家と相談し、株分けをしてお互いに育てることにしました。久根下家の株分けされた牡丹は「〇〇〇〇〇〇」として、門外不出を守り続け、誰の手に渡ることなく、四百余年もの間先祖代々大切に守り育てられてきました。・・・」

久根下家の株分けされた牡丹を、何と呼んでいたのでしょうか。次の中から一つ選びなさい。・・・③

大切な牡丹を兎川寺一箇所で育て、万一絶（た）やしてしまうことを恐れた住職は、檀徒総代（だんとそうだい）の久根下家と相談し、株分けをしてお互いに育てることになった。右の写真のように久根下家に株分けされた牡丹は「殿様の白牡丹」として、門外不出を守り続け、誰の手に渡ることなく絶やすことなく、400年余もの間先祖代々大切に育てられてきた。



10. 「数百年の年号を経て、昭和33年に末裔（まつえい）の故小笠原忠統（ただむね）氏のもとに返されました。忠統氏は先祖が居城した松本城の庭に、この花が毎年咲くことを希望され、今の場所に移植されたといいます。・・・」これを機に、この牡丹を何と呼ぶようになったのでしょうか。一つ選びなさい。・・・②

小笠原牡丹と呼ばれるようになった。毎年5月中旬頃には純白の大輪をつけ、清らかに咲き誇り、戦国の古を私たちに問いかけているようでもある。平成18年には、久根下家より3株寄贈され合計6株となった。これからもたくさんの花を咲かせることしよう。

